

「日本写真保存センター」調査活動報告(25)

戦争に翻弄された写真界からの船出

松本 徳彦 (副会長)

1941(昭和16)年12月8日、真珠湾攻撃に突入し太平洋戦争が始まった。その前年の1940(昭和15)年12月、それまで11誌あった写真雑誌が内閣情報局の命で、『写真文化』(カメラ、写真サロン、カメラクラブのちに『写真科学』と改題)、『アサヒカメラ』(アサヒカメラ、芸術写真研究、肖像写真研究)、『写真日本』(小型カメラ、アマチュアカメラ、光画月刊)、『報道写真』(フォトタイムス、カメラアート)の4誌に統廃合された。1943(昭和18)年になると、アマチュア写真団体の全日本写真連盟(朝日新聞)と興亜写真報国会が統合され大日本写真報国会となり、大政翼賛会文化部の一翼として活動することになり、写真家は否応なく国策に協力することになった。戦局は厳しく都市部への空襲が激しくなり写真界は沈黙状態となる。

これまでの限られた情報しかなかった国民に、1945(昭和20)年の敗戦で、一気に国民は知る権利を手に入れる。それを代弁したのが新聞、雑誌の復刊と創刊であった。写真雑誌の復活は1946(昭和21)年1月に、戦前からあったアルス『カメラ』の復刊からであった。粗悪な紙に水性インクで刷られた32頁1円80銭の本が飛ぶように売れた。本文で桑原甲子雄が「反省と前進」、濱野金平が「日本の報道写真陣営は第二次大戦中何をしたか」、西村龍介が「いまだ焦点を結ばず」を寄稿する。当時の社会状況が読み取れる。次いで2月にはグラフ誌『世界画報』(越寿雄編集長)が、4月には『サン写真新聞』(毎日新聞)が創刊。翌1947(昭和22)年11月には写真を主体にした週刊紙、名取洋之助編集によるB4判24頁の『週刊サンニユース』(木村伊兵衛、三木淳、稲村隆正、長野重一、菌部澄、田沼武能、佐伯義勝、石井彰ら)

が、日本の『LIFE』誌を目指して発刊したが、紙質、印刷が良くなって売れ行きが伸びず2年余で廃刊になる。1949(昭和29)年10月に『アサヒカメラ』(津村秀夫編集長)が復刊し、写真雑誌の隆盛期を迎える。

ビジュアルな『写真文庫』の登場 (1950～59)

1950(昭和25)年6月、岩波映画社(岩波書店)は名取洋之助を編集責任者として、全頁を写真で埋め尽くした『岩波写真文庫』を創刊した。B6判100円と小ぶりながら、テーマと内容が充実していて、アート紙に刷られた写真が時代を的確に捉えて見応えするものであったところから、1959(昭和34)年休刊するまでに286冊を発行した。スタッフには長野、菌部、織田浩、東松照明などがいた。

日本写真保存センターは、2017(平成29)年8月、『岩波写真文庫』全286巻に関わる写真原板約41,000本を岩波書店から寄託を受けた。

『写真文庫』は敗戦から経済復興に立ち上がった日本人の力強い活力によって、農漁業などから石炭、鉄鋼や繊維をはじめとする産業の変化や、暮らしや環境、医学、衛生に関わる科学、教育、芸術などの文化、地球を取り巻く気候や宇宙に関する分野では、北海道大学の物理学者中谷宇吉郎博士の「雪の結晶」がある。実験室で人工雪の結晶を世界で初めて完成する。その研究過程を分かりやすく解説した。また秋田で雪崩研究の第一人者である高橋喜平の「雪と氷の造形」もその造形美の記録に驚く。「野球のバッティング」を高速度カメラで撮影し、その運動を科学的に分析するなど、可視化の威



岩波書店書庫で『写真文庫』の資料調査



収集した写真原板とコンタクトブックの一部

力を見せる。社寺の歴史的文化財の紹介、入江泰吉の「奈良の大仏」、京都の古都見どころ探訪。都市のビル建設や都市形成などをビジュアル化。長野重一の「東京―大都会の顔」。田村栄や織田浩などの昆虫から小動物の不思議な生態。乗り物の変遷、さまざまな交通機関をあらゆる角度から解説するなど、綿密な調査と写真を有効に使って、楽しめる誌面となっている。「新風土記」は都道府県の地勢や産業、観光など国勢全般を網羅した写真地図でもある。名取洋之助の「アメリカ」「麦積山」「四川、揚子江」などの探訪記事。坂本万七、藤本四八、藺部澄による「中国の彫刻」、木村伊兵衛の「歌舞伎」なども見応えがある。熊谷元一が撮った「小学生―ある小学生の記録」は定点観測の先駆けか。三木淳、樋口進の「赤ちゃん―誕生まで」はこどもの世界を。「広島―戦争と都市」は松重美人、林重男、菊池俊吉、相原秀次らによる原爆被災から復興にむけての記録。影山正雄、石川光陽、朝日新聞、読売新聞、共同通信社などによる「戦争と日本人 あるカメラマンの記録」も戦後日本の貴重な記録写真である。岩手の「村と森林」を撮った朝倉隆、川島浩などが、国内外の事情などをきめ細かく捉えて、小百科に匹敵する情報が盛りこめられている点で画期的な編集であった。

この写真原板の主体は35ミリフィルムで、6×6サイズのもののガラス乾板で撮ったものもある。原板のほかに編集に使ったモノクロプリントとネガ台帳、関係資料一式が寄託されている。

それぞれの時代をひも解くには都合のよい資料写真が無数にあることで、ときを刻んだ資料としての価値が高く、利活用が望まれる。

風土に適した特徴を持つ民家 高井 潔 (1938～)

1961(昭和36)年、日本大学芸術学部写真学科を卒業した高井潔と増田彰久両氏が、大手建築会社の大成建設に就職した。二人は揃って広報部に配属され、経済成

長が加速され、新築ラッシュに沸く近代建築の現場や竣工したビル群を撮り続けていた。二人とも会社勤務を続けるかたわら、休日を利用して、高井は国内に残る古い民家を撮り歩き、約2000軒もの消えゆく民家を撮り続けた。増田も同様に近代化が始まった明治以降の洋風建築を建築史家の藤森照信東大教授と組んで撮り続ける。ともに写真集、展覧会と発表を続け建築写真家としての地歩を固め、それぞれ数多くの写真賞を得ている。

高井が撮り続けたものに1973(昭和43)年に刊行された写真集『日本の倉』(淡交社)がある。初の写真集ではあるがこれが凄い。執筆が建築史家、工学院大学学長の伊藤ていじ、装丁田中一光と豪華。伊藤氏は「土蔵が身分の象徴であったのはかつての日のこと、…名残りのつきない郷愁の種にすぎないかも知れない。…すべて人間が創造してきたものは、それが滅び消えようとするときに、もっとも真価が問われているのである。」(『日本の倉』淡交社)と綴り、文化と歴史の重みをどう活かすかを雄弁に語っている。ページをめくるごとに展開する穀物を貯蔵する倉から、豪農屋敷、酒蔵、商家の土蔵と気候風土に適応する造り方などを、北海道から九州までを走破して撮った力作が連なる豪華本。この成果が認められ、1974(昭和49)年の日本写真協会新人賞を受ける。

その後も写真展「日本の民家」「日本の倉」「中国大陸・北京の古建築」「結界の美―暖簾」「日本の民家―先人に学ぶ」「民家の風貌」などを催す。さらに写真集では『日本の民家』『日本の屋根』『日本名建築写真選集・民家』『岩崎家四代のゆかりの邸宅・庭園』『蔵』『暖簾』『日本の民家紀行』『日本の民家・美と伝統』(東日本・西日本編)を表わすなど、精力的な活動が続ける。

この度、その初作の『日本の倉』に掲載された4×5判のモノクロ写真原板110枚が保存センターに寄贈された。



佐藤家の座敷倉の内部(山形市)

撮影・高井 潔



サフラン酒造の土蔵(新潟県長岡市)

撮影・高井 潔